

2019年の8月にメキシコに渡航し、気付いたらもう日本に帰国して1か月以上が経っている。「時間が流れる感覚は、年齢を重ねるごとに加速する」などとはよく言ったものだが、今後過ごしていく時間はこの1年よりもさらに速いスピードで進んでいってしまうのだろうか。

私事だが（というか今回も私事ばかりだが）諸事情があり、現在免許を取るために教習所に通っている。同じ文化背景を持つ同年代がたくさんいる、という空間がまず久しぶりすぎて戸惑っているが、それより何より私が驚きを感じたのだが、自分のリスニング力の低下である。英語やスペイン語の話ではない。「私の母語である日本語の」リスニング力の話である。

「いやいや、母語をうまく聞き取れないなんてあるわけないでしょう。」と思われるかもしれない。実際、私自身でさえそう思った。「第二言語もろくにできないのに、母語までうまく使えなくなってどうするのだ…」と。

なぜ、日本語をしっかり聞き取って理解する力が落ちてしまったのか。「毎日スペイン語ばかり使いすぎて日本語忘れちゃった？」と、冗談交じりに聞かれそうであるが、実際メキシコ滞在中にスペイン語しか使っていなかったのか、と言われると答えは否なのである。YouTubeのゲーム配信（日本語）をBGMに課

題をしていたし、日本の友人とも定期的に通話はしていた。日本の曲もよく聞いていた。LINEやInstagramなど、文面でやり取りする方法以外にも、実際に日本語を喋ったり聞いたたりした機会は決して少なくなかった。

「日本語を使わなくなったからうまく聞き取れなくなった。」というのは考えにくい。そこで、私がなんとなくだが思いついたのが「スペイン語学習を通じて、母語である日本語の一つ一つの単語の意味を今まで以上に丁寧にくみ取るようになったから。」ではないか、ということである。

一年を通じて大量のスペイン語の文献を読んだが、学部の勉強ということもあり、そのほとんどは専門的な内容だった。スペイン語の辞書を引く時間はもちろん多かったが、同時に増えたのが日本語の辞書を引く時間である。学術用語の確認、言葉の定義の確認が主な目的だったが、そもそも私は日本語の意味を調べるタイプではない。なんとなく理解して、なんとなくわかった気になる人間だ。

そんな人間が日本語の意味も引き出すようになって、どうなったかというと、不器用なもので、現在どうやら耳から入ってきた各単語を丁寧に理解しようとしすぎているらしい。すべての単語が気になってしまっているのだ。

なんだかよくわからない日本語Tシャツ多すぎ問題。  
メキシコで日本語学習者が多い証拠…？



メキシコの風景UPしたり、レポートで書かなかったことを綴ったり。

Instagram @mio.mexico

note @mio.mexico

今後もネタが尽きるまでぼちぼち更新します。

外国語を勉強した弊害(?)とでも言おうか、1年間メキシコでスペイン語をうまく理解することができなかった悔しさからくる反動なのか、日本に帰ってきて、どこにいてもみんながみんな日本語を使っているというこの状況で「母語だからすべて理解できるよね?」というプレッシャーを自分で自分にかけているような感じもする。

人は言葉を理解するときに、情報を取捨選択して必要なものだけを選び取っているという。今、この取捨選択という機能がバグっているような気がする。自分の「母語に対する考え方・とらえ方」がこの1年間で大きく変わったのではないかということに気付いた。

自分自身、外国語の学習者であり、海外への興味も大きかったこともあってか、ずっと「わからないこと=怖い」と思っていた。外国語に関して言えば「学校では〇〇と習ったけれど、これはこの国で本当に自然な使い方なのだろうか。自分が理解しているニュアンスと同じようにネイティブは感じ取るのだろうか。例外があるのではないだろうか。実は失礼な言葉遣いになっているのではないか。」というのがつつい気になってしまう。特にテキストでのやり取りの時によく考えてしまって「本当にあっているのか。」という疑念からどんどん返事が遅くなってしまう、というのはよくあるパターンだ。

ただ、この「わからない=怖い」は、海外に関することに限らず、日本にいるときも頻繁に感じることもあるのだ。個人的な話をするが、例えば、私は中学の頃まで一人で会計ができなかった。レジに行くのが怖かったからなのだが、これはレジの店員と客のやり取り、というのが理解できていなかったことによる。文脈を把握できていなかった、ともいえるだ

ろうか。「レジに並び、会計をして、お金を払う」という単純な流れではあるが、この各動作でどのような言葉を投げかけられるのか、その想像ができなくて、当時の私にはとてつもなく恐ろしかったのだ。



足繁く通った Picnic。経営者夫婦は親日家で帰国の際、折鶴を同梱した手紙をもらい泣いた。

折角なので、このまま少しお会計の話が続けるが、例えば「袋、要りますか」という単純な問いかけがあったとして「はい・いいえで答えていいのだろうか。もっと自然な受け答え（例えばその状況の時だけに使える特殊な言葉、合言葉のような）があるのではないか。どう返すのが普通なのだろうか。」ということが何かと気になっていたのである。

ただ、この「わからない=怖い」がこの1年間のメキシコの経験で『『わかる』も怖いんだなあ』と思うようにもなった。

「わかる」のに「怖い」とはどういうことか。日本だと「同調圧力」が「わかるから怖い」ものの最たる例なのではないかと思う。言葉を理解する上では、その単語の意味を知っていることは勿論だが、その言葉が使われる状況や文脈をしっかりと理解する必要もある。例えば「大丈夫」という言葉は文脈によって使われ方が大きく変わってくる。言葉の意味自体はわかっている、その文脈を間違っ解釈してしまうと、話が成り立たない。

メキシコの風景UPしたり、レポートで書かなかったことを綴ったり。

Instagram @mio.mexico

note @mio.mexico

今後もネタが尽きるまでぼちぼち更新します。

テキストの言葉を理解する際は、瞬時に文脈を理解する必要性はそこまで高くない。よくわからないところがあったら、時間をおいてもう一度読んでみたり、調べてみたりすることができる。ただ、実際の会話ではそうはいかない。すぐに文脈を正しく解釈するための状況判断能力も求められる。

テキストでは基本的に視覚情報が主となっているが、会話では聴覚は勿論、視覚も重要であるし、時にはジェスチャーを交えるなど、触覚を使うこともある。いろいろな感覚器官から受け取る情報を一瞬で処理しなければならないので、なかなか大変な作業だ。

同時に複数のことを処理するのは慣れが一番なのかもしれない。海外に行くとなんとなく疲れて眠くなってしまふのだが、これは慣れない空間であることは勿論、膨大な量の未知の情報に圧倒されるからだろう。

現地での情報収集は非常に重要なポイントだ。「言語習得」とはただ単に文法と単語の意味を覚えることではない。言葉を使えるようになるためには、文脈を把握するための基礎的な情報が必要だ。

私は言葉を学ぶためだけにする留学についてはずっと否定的だった。言葉の勉強だけであれば、別に海外に行かずとも本気になれば日本でできるからだ。メキシコ留学も「スペイン語を学ぶ」ではなく「スペイン語を使って何かを学ぶ」ということを軸に置いていた。

ただ、言語習得の面に関しては、やはり現地にいることで、学んだことがすぐに使える環境が揃っているのはかなりの利点であるし、メトロポリタン自治大学への学部留学はスペイン語を学ぶ授業はなかったのも、CEPEを出て以降は自主学習がキツく感じたこともあった。

語学を学ぶときのクラスメイトはみな非母語話者だが、学部で学ぶときのクラスメイトは基本的に自分以外みな母語話者だ。これがメリットであり、デメリットなのである。

語学学校にいるのは主に非母語話者同士である。そこに在る時点で「非母語話者である」という共通点がある。クラスでもまずは全員、自己紹介をするし、友達になりやすい。ただし、そのやり取りはネイティブのものではないから、不自然だった場合でもそのまま進行する。

学部では、ネイティブの発話に接する機会は多いが、先生による「スペイン語についての」説明はないし、自分からうまく質問することができなければ詰む。話題の共通点を探すのも一苦勞である。そもそも友達になるきっかけ作りが難しい。

論文を読むために必要な単語と文法は、会話で使うそれとも語学学校でクラスメイトと話すそれとも異なってくるのだ。

語学学校に通っていても、会話のきっかけを作る方法まで教えてくれるわけではない。レベル分けテストや検定試験などは、指標の一部であって絶対的なものではない。私はコミュニケーション力が低いので、話のきっかけをつかんだり、話題を展開させたりするのが不得手だ。文法や単語は人一倍勉強しているつもりだが、この「コミュ力」がネックになる。



セブンイレブン、メキシコにもあるが結局全然行かなかった。

メキシコの風景UPしたり、レポートで書かなかったことを綴ったり。

Instagram @mio.mexico

note @mio.mexico

今後もネタが尽きるまでぼちぼち更新します。

単語や文法をないがしろにして良いわけでは決してないが、単語や文法などのミスはあまり気にせず、コミュニケーションの姿勢だけで、乗り越えられるケースも多い。

これらの学習者としての気付きは、自分が日本語を教える立場になった時のためにも忘れてはならない、と考えている。

日本語学習者数は年々増加しており（国際交流基金：2018 年度海外日本語教育機関調査結果による）、また在留外国人も過去最高を記録している（法務省：令和元年6月末現在における人数、約 283 万人）。日本語教育の需要は年々高まっているといえる。

私も日本語教育には興味があり、大学では「日本語教員養成課程」を修了している。このコースは日本語を母語としない人を対象にしたもので、その中のカリキュラムの一つ「日本語教授法演習」の思い出は色濃い。実際にプログラムを企画しなければならない授業で、私の所属したグループでは近隣大学学生寮に住む留学生を対象とした日本語おしゃべり会の定期開催を行った。

この授業で最も重要視されていたのが「本物のニーズ」である。文献や SNS で調べてニーズをわかった気になるのではなく、ターゲットと実際に接触し、本当に必要としているニーズをうまく引き出し把握すること。そのため対面での活動に特に重きが置かれていた。

プログラムを実施してわかったことは、留学生と一言で括ってもとても幅広いこと。大学によっては、留学生を受け入れる際に日本語レベルを要求しないところもあり、まったく日本語ができない状況で日本に留学に来ている学生もいる。（英語で開講される科目を履修するらしい。）

留学生のために日本語の授業を開講すると

ころも多いが、他の授業と日程がかぶってしまい、日本語の授業が取れないことも。短期の留学生は、思ったように日本語の学習に時間を割けないという現状がある。

大学院の留学生の中には、家族連れで来日する人も多い。その場合、留学生の家族は、留学生よりも日本語に接したり学習したりする機会が殊更に少なく、家で過ごす時間も長く、結果、孤立してしまうこともある。

日本語学習の意欲があっても、思ったように日本語教育が受けられない人は多い。日本に来るぐらいの意思がある人でも、である。

ただ、これは個人の所感でもあるのだが、日本にいながらにして海外の人とつながりたいと思う日本人は決して少なくないように思える。そういう人とうまくマッチングできないものだろうか。

HelloTalk（スマホアプリ、言語交換目的の Twitter のようなもの）を筆頭に、いろいろなアプリがあるが、基本的に一对一のテキスト、または通話でのやり取りとなる。ただ、言語を学習するには、実際の発話では母語話者が二人以上いる状態でやり取りをしたほうが良い。

日本語母語話者 2 人、非母語話者 1 人でグループを作っておしゃべり会をすると、非母語話者は母語話者 2 人の自然なやり取りを観察することができる。また、非母語話者の不自然な発話を日本語母語話者二人で意見交換しながら訂正することができる。日本語はニュアンスがとても重要な言語である。「間違い」と感じるラインも人それぞれだ。一人が不自然だと感じて、もう一人は全く問題のない発話である、ということもある。複数人いることで過剰な訂正を抑制でき、またいろいろな発話例を引き出すこともできる。

日本に住む多くの人とは外国の人と交流をす

メキシコの風景 UP したり、レポートで書かなかったことを綴ったり。

Instagram @mio.mexico

note @mio.mexico

今後もネタが尽きるまでぼちぼち更新します。

## 最終レポート「言葉を操るということ」

山本 美緒

際に「でも英語できないからなあ…」と言いがちだ。ただ、これは盛大な勘違いではないかと思う。メキシコでは基本的に英語は伝わらないと思っておいたほうが良いし、うまい英語よりも下手なスペイン語のほうが喜ばれる。英語は確かに広いエリアで話されている言葉ではあるが、全員が話せるわけではない。英語を話すと確かに世界は広がるが、今日の前にいる人に確実に英語が伝わるとは限らない。

そもそも、日本にいるのになぜ英語で対応をする必要があるのだろうか、と思ひもする。観光客の中にも、多少は日本語を勉強している人はいるだろうし、せっかくの旅行の機会、日本語に触れることを楽しみにしている人もいるはずだ。英語での対応は思いやりからくる行動であることは想像できるが、まずは日本語で対応をしてもいいのではないかと思う。いきなり英語で対応することは、見た目で人を差別している、とも捉えられるからだ。見た目が外国人だから、日本語がわからないだろうから、英語で対応しよう。一見優しい気づかいのように見えるが、自分の価値観や思い込みの押し付けなのである。良かれと思って英語で対応したその人は、もうすでに日本に来てから何十年も経っている人かもしれないし、何なら本当は日本生まれ日本育ちの日本国籍を保有する日本人かもしれないではないか。

一度、日本語で対応してから、向こうが難色を示したり、英語で話してきたりしたら、英語で対応してあげればいいのかではないだろうか。

また、接客以外の状況でも、たとえば災害時などは、即座にたくさんの人への情報伝達が重要となる。そのようなときに、短い時間で複数の言語に翻訳するのはとても難しい。

様々な状況を考えても、多文化共生が叫ばれるこの時代、日本では「やさしい日本語」が

より普及してほしいと思っている。日本の定住外国人に、理解できる外国語について調査したところ、英語よりも日本語のほうが高ポイントだった、という研究結果もある。日本語非母語話者に一方的に日本語学習を強制するのではなく、私たち母語話者が歩み寄りを見せる姿勢が今後、大事になっていくのではないだろうか。



日本のお店ではない。  
メキシコにある日本食レストラン  
「大黒」なのである…。

おまけ：現地スーパーで買える SHITAKE。



後書き(?)：ここも見つけてくれてありがとうございます。前のレポートでも書いたんですが、最終レポートでも書きたくなってしまいました。今回1年間、色々なレポートを書かせていただきました。自分の気持ちが一番大事とは言えど、何かしらの形で残しておかないと思いはいつのまにか自分の手を離れていってしまうことも。好き勝手書かせていただいた、自分の備忘録のようなレポートでしたが、多くの人と共有することができて感無量です。埼玉県国際課の皆様、こんな生意気なレポートをいつも楽しんで読んでくれたとのこと、本当にありがとうございました!!!

山本美緒

メキシコの風景UPしたり、レポートで書かなかったことを綴ったり。

Instagram @mio.mexico

note @mio.mexico

今後もネタが尽きるまでぼちぼち更新します。